

祝

2018年2月 東京大学博士号(学術)取得

駒井睦子さん(取得時53歳)

【論文テーマ】アルフォンシーナ・ストルニの詩の道程 — モデルニスモから前衛、アンティソネットの創造へ —

10年かけて詩の素晴らしさを伝えられる自信がついた。やって良かった

■日本でほぼ唯一のストルニ研究者

「アルフォンシーナ・ストルニ」を探索してみる。20世紀初頭のアルゼンチンの女性詩人で、46歳で海に入水自殺。それを受け作られた「アルフォンシーナと海」という名曲が、今も多くの演奏家にカバーされている。ネットの日本語で得られる情報はそれくらいだ。ただし、駒井睦子さんの考察を除いて。

駒井さんは、1988年から5年間アルゼンチンに住んだのを機に、ずっとスペイン語に触れ、もし勉強し直すなら、アルゼンチンからテンアメリカ諸国の詩人について研究しようと決めていた。

「始めはストルニをよく知らなかったのですが、日本に戻って清泉女子大学に3年次編入した際、ラテンアメリカ研究の一人者・杉山晃教授に相談し、何人か候補を挙げていただいた中にストルニがいたのです。ストルニは、父親が亡くなって生活が苦しい中、自力で進学し教員免許を取るなど、若くして苦勞をします。そんな中、文学の素養はないにもかかわらず詩を書きます。そして、シングルマザーの道を選び、乳がんによる乳房切除といった女性ならではの苦難にも遭遇しながら、詩を書き続けた彼女の人生に心を惹かれたのです」

■10年かけて本当の良さを理解できた

東京大学大学院では、地域文化研究を専攻し、文学を通して地域を見る、地域を通して文学を見るといった位置づけで、ストルニの研究を深めた。ストルニは、アルゼンチンやラテンアメリカ、そしてスペインでも、知らない人はいないくらい有名な。し

かし日本では深く研究された前例はない。

「作品分析を中心に、彼女の全体像を掴むことをしました。全創作期間を対象に、作風の変化、周囲の作家から受けた影響などを調べ、変化しながら辿り着いた創作は何だったのかを考察しました。懸命に生きて詩を書くうちに無意識に生き様が詩に投影され、独自のスタイルが確立されました。最終的には詩を通して自己の開放に向かっていたのです。最初は詩人としては下手かとも思ったこともありましたが、10年やってきて本当の良さがわかりました」

■博士号は無理だと思っていた

「大学院に入った当時は、博士号まで行けるとは思っていませんでした。東大の学生は知識があるだけでなく、発想が豊かで視点も多角的。ずっと劣等感を抱いてたんです。ですが、周りの若い学生たち



「やると決めたらやるしかない。やらない言い訳はたくさんできますが、やれるのは貴方しかいませんよ」

が『駒井ねえさんはいつ書くの』と、当然のように言ってくれて、自分も書かなければと思うようになりました。後はもう意地ですね。財団の支援事業仲間とも励ましあって書きました。いくつかの大学でスペイン語の非常勤講師をしていたので、隙間の時間にいろんな場所で書いていた記憶があります」

■未成熟な日本のジェンダー意識を変えたい

実績が評価され、4月から専任講師のイスを得たが、学生には博士号取得は伝えていないという。

「ようやく研究者らしくなったとは感じますが、松田理事長がおっしゃるとおり、博士号取得はスタートです。日本にはスペイン語文学の研究者は少ないので、その部分で貢献しつつ、スペイン語の論文発表によって海外の研究者との共有を進め、続く研究者の踏み石になればと思います」

今後もスペイン語圏の文学を中心に、男女を問わず詩の研究を進める。現在、ウルグアイのデルミラ・アグステイニという女性詩人の研究をしており、6月に学会発表をする予定だ。

「ストルニがフェミニズム的な詩を書いていたこともあり、研究の延長として、日本のジェンダー意識を変えたいという思いがあります。男女平等度が144か国中114位で、先進国中最下位だとか、昨今の政治家や官僚のセクハラ報道とか、社会の未成熟さを思わされます。そのほとんどは男性が既得権や支配権を守ろうとすることから来る問題ではないでしょうか。私は草の根からしかできませんが、少しでも周りに訴えていきたいと思っています」